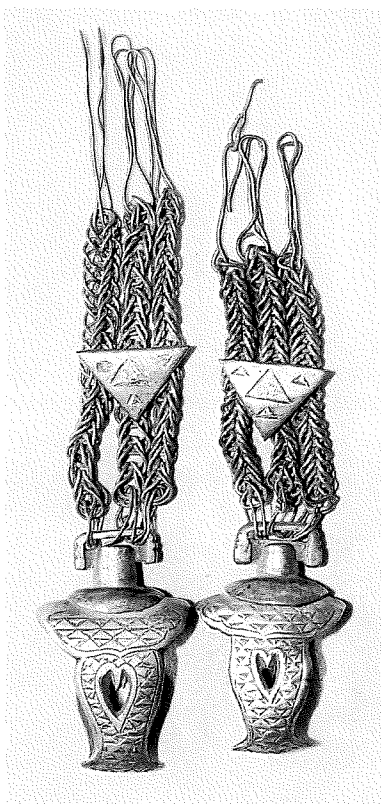


〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ11 三鱗紋兵具鉤太刀の帯執金物

日本風俗史学会 齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会委員

中古から中世の刀剣すなわち太刀は、近世の帯に挿す刀と違って、刃を下に棟(峰)を上にして、「一の足」「二の足」二個の帯執金物の上端の羅に通した帯を腰に結び佩く。

帯執金物は鞘部分の足金物、その上の櫓金と帯を通す帯執で構成される(左図参照)。



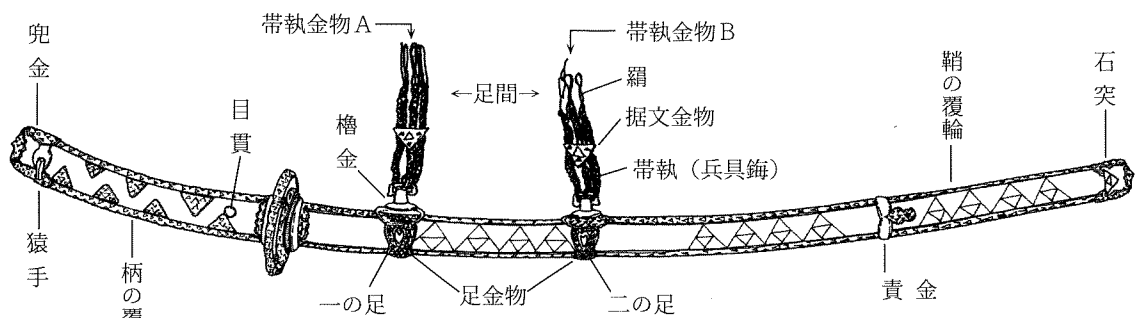
太刀等に用いた。鎌倉時代には帯執を三・四条の鉤(鎖)にした兵具鉤(鎖)太刀が流行する。兵具鉤は兵庫鉤ともいう。鎌倉鶴岡八幡宮には七つ金の帯執の沃懸地杵葉文螺鈿太刀(国宝・二振)が残る。一方、同社蔵鎌倉時代の、菊・丸寓生文と、花輪違文の二振の兵具鉤長覆輪太刀の存在も「集古十種」が記録する。このように兵具鉤太刀は、

鞘等に文様を彫り、長覆輪で鍍金銀や漆蒔として、公家の飾太刀に比すべき華麗さなので、殿舎の飾調度ともなった。藤原定家「明月記」建仁三(一一〇三)年十二月十日の条には、天皇行幸の御殿に沃懸地杵葉文兵具鉤太刀を調度としたとある。また寛喜三(一一三三)年十一月三日宣旨(勅命)で、奢侈品として兵具鉤や長覆輪の太刀を禁制している。かように華美なので神宝とされることが多く、伝存の中世の遺物は殆ど寺社所蔵品である。武蔵国内では埼玉県の氷川女体神社に三鱗紋兵具鉤の長覆輪太刀がある。鎌倉時代の例である上に、刀身が実用ならぬ生鉄なのは、奉納用であることも示して貴重である。

武蔵国内での伝存品は、他に residual であるが、武蔵御嶽神社のみである。氷川女体神社と同意匠の鎌倉時代の三鱗紋兵具鉤長覆輪太刀の兵具鉤帯執金物部分二個を所蔵する。

すべてに鱗文を彫りつけた女体社の太刀と同じく兵具鉤に三鱗紋の据文金物を、櫓金の座と足金物は蹴彫や線彫の鱗文で埋める。一一九三(永仁元)年前成立の合戦絵・蒙古襲来絵詞には、家紋を意匠した武具がすでに描写されるので、この鱗文も鎌倉幕府執権の北条氏の三鱗紋を意識した制作と考える。

帯執金物は、全長17.1cmの長い方を一の足(Aと仮称)、14.2cmの短い方を二の足(B)として観察する。帯執部分は剥落するが、鍍金の銅線で、羅も鉤の輪も鍍付けとする。針金の太さA 0.55mm、B 0.7mm。鉤の長さA 11.8cm、B 8.76cm。鉤の編数は共に左端21個、他は22個。鉤三条分の幅はA 2.15cm、B 2.05cm。三角形の据文の三鱗文は逆に取り付けるが、後世の改造ではない。据文金物の寸法はA 1.71cm×2.58cm、B 1.8cm×2.44cm。鉤の裏側の長方形金銅板の左右を曲げて平釘として両端の鉤を通し、中央の鉤は真中



三鱗紋兵具鉤長覆輪太刀 復元図 作図 伊藤博司氏

の丸釘を通し表側の据文に鑲付けて留める。この三本の釘は上端から11個と12個めの鉤の辺を貫き三条の鉤を平にまとめる。櫓金の足は筒状の台に通って櫓の無文と四弁の葵葉座の台座を貫き葵葉座裏でかきめて固定。葵葉座棟通りの長径A 3.56cm、B 3.44cm。鱗文を繁く刻む足金物は、瓶子形で様式化した猪目を切透す。この様式の足金物は、鎌倉中期を溯り得ない平治物語絵巻に専ら描写されるので、御嶽の太刀の年代は鎌倉中期以後である。Aの足金物の内径最大値は縦3.55cm、横1.14cm、Bは縦3.31cm・横1.55cmなのでもとの鞘は平鞘である。縦の径の通減率からもBが二の足であろう。足金物は底部で鑲付けされる。素材の金銅板の厚さA 0.14cm、B 0.11cm。二個の帯執金物は揃いと思われ、各数値や、刻風、形状、素材に別工房の制作かと思われる相異もあり、二振分の可能性もある。重量が長い方のAは47g、Bが60

gである点も、問題を残す。氷川女体神社と当社の兵具鉤長覆輪太刀が省略手法の傾向で同一様式、同一年代であることは、奉納用太刀を多量に必要とする事情を想像させる。太刀の制作年代が蒙古襲来と年代的に重なるのは偶然ではない。武蔵国のこの間の事情を語る中世文書三点が、東寺百合文書(埼玉県史 資料編5)にある。すなわち弘安六(一一八三)年十月五日付、鎌倉幕府連署駿河守業時から武蔵国の守護代の北条時宗あて、知行国の武蔵国等の寺社での異敵降伏の祈禱を命じた御教書(將軍の命の示達状)である。次に正応五(一一九二)年十月五日付、連署大仏宣時から、また延慶三(一一三一)年二月廿九日、同じく大仏宣時と執権北条時宗からともに北条貞時あての御教書がある。

時宗・貞時は上位の執権であるが、北条得宗家として武蔵国の知行主・実務者なので、初め

今回の詳細な計測観察には、伊藤博司氏・北村和寛氏の協力を得た。三鱗紋金具鉤長覆輪太刀の復元図は、伊藤博司氏の苦心による。参考文献は、鈴木敬三編「有職故実辞典」・須崎直衛「元寇雜記」(日本学研究)三巻七号所収・竹内理三編「鎌倉遺文」六巻の学恩を得た。